春になる前夜

小川未明

青空文庫

すずめは、もう長い間、この花の国にすんでいましたけれど、かつて、こんなに寒い冬の晩に出あったことがありませんでした。

日が西に沈む時分は、赤く空が燃えるようにみえましたが、日がまったく暮れてしまうと、空の色は、青黒くさえて、寒さで音をたてて凍て破れるかと思われるほどでありました。どの木のこずえも白く霜で光っています。ものすごい月の光が一面に、黙った、広い野原を照らしていたのでありました。

すずめは、一本の枝に止まって、この気味悪い寒い夜を過ごそうとしていたのです。そのとき、ちょうど下の枯れた草原を、おおかみが鼻を鳴らしながら通ってゆきました。

山にも、沢にも、もはや食べるものがなかったので、おおかみはこうして飢じい腹をして、あたりをあてなくうろついているのです。すずめはそれを毎夜のように見るのでした。おおかみも今夜は寒いとみえて、ふっ、ふっと白い息を吐いていました。そして、氷の張った水盤のような月に向かって、訴えるようにほえるのでありました。

すずめは、さすがのおおかみもやはり、今夜はたまらないのだと思って、黙って下を見ていますと、おおかみは、急に腹だたしそうに、もう一度高い声で叫びをあげると、荒野を一目散に、あちらへと駆けていってしまったのです。すずめはしばらく、その後ろ姿を見送っていましたが、いつかその姿は、白いもやの中に消えて見えなくなりました。

すずめは、もうこれから、長い夜をなんの影も、また声も聞くことがないと思いました。どうか、今夜を無事に過ごしたいものだと思って、じっとして目を閉じて眠る用意をしたのです。しかし、寒くて、いつものように、どうしてもすぐには眠つくことができませんでした。

そのうち、急にあたりがざわざわとしてきました。驚いて目を開けて見まわしますと、いままで、さえていた月の面には、雲がかかって北西の方から、寒い風が吹いてくるのでした。すずめは、いよいよ天気が変わると思いました。

北国には、こうして、掌の裏を返さないうちに、天気の変わることがあります。

このとき、ここに哀れな旅楽師の群れがありました。それは年寄りの男と、若い二人の男と、一人の若い女らでありました。この人々は、旅から、旅へ渡って歩いているのです。そして、この荒野を越して山をあちらにまわれば、隣の国へ出る近道があったのです。もうこちらの国も思わしくないとみえて、その人たちは、隣の国へゆこうとしたのでしょう。そして、道を迷って、こんな時分に、ようやくここを通るのでありました。

みんなは、うすい着物しかきていません。また、それほどいろいろのものを持っている道理とてありません。まったく、貧しい人たちでありました。

みんなはたがいに慰わり合いながら、月の光を頼りに歩いてきましたが、このとき、ちら、ちら、と雪が降ってくると、もはや、一歩も前へは進めなかったのです。

「ああ、とうとう雪になってしまった。」と、一人の男が、ため息をもらしていいました。

「私たちは、今夜は、野宿をしなければならないでしょうね。」と、若い女が、頼りなさそうにいいました。

「野宿をするにしても、この雪ではねるところもないだろう。」と、ほかの男がいいました。

四人のものは、転げるばかりに、疲れと、不安とで、もはや前へ踏み出す勇気もくじけていたのです。

雪は、ますます降ってきました。そして、たちまちのうちに、木を、丘を、林を、野原一面を、真っ白にしてしまいました。月の光は、おりおり雲間から顔を出して、下の世界を照らしましたけれど、その光を頼りに歩いてゆくには、あたりが真っ白で、方角すらわからなかったのであります。

「おじいさんは、あんなに疲れていなさる。」と、先になっていた一人がいって、振り向いて立ち止まりました。すると、ほかのものも等しく立ち止まって、みんなから遅れがちになって、とぼとぼと歩いていた年寄りを待つのでありました。

「ああ、みんなのもの、もう急いだってしかたがない。何事も運命だ。私たちが道を迷ったのも、またこうして雪が降ってきたのも、みんな運命だとあきらめなければならない。この雪では、夜道もできないだろう。そして、いつおおかみや、くまに出あわないともかぎらない。せめて、ここにある酒でもみんなして飲んで、唄い明かそうじゃないか。」と、おじいさんはいいました。

「ほんとうにおじいさんのいいなさるとおりだ。私たちは、長い間、仲よくして、諸国を歩きまわってきたのだ。最後まで、おもしろく、いっしょに死のうじゃないか。」と、若い男の一人がいいました。

「わたしは、悲しい。しかし、いまはどうすることもできません。すべての希望を捨ててしまいます。」と、女は涙ながらにいいました。

「ああ、泣くでない。若い女や、若い男が、このまま死んでどうするものか、きっとすぐに生まれ変わってくる。私のいうことを疑うじゃない！」と、おじいさんはいいました。

みんなは、背中に負っている荷物を下ろしました。そして、雪の上に拡げて、徳利に入れて下げてきた酒をついで、めいめいが飲みはじめました。みんなは、いくら寒くても、酒の力で体があたたまりました。すると、おじいさんは、

「さあ、みんなで歌うだ！　弾くだ！　この世でのしおさめに、力のかぎり出してやるのだ。そして、くまも、おおかみも、山も、谷も、野原も、心あるものを、みんなびっくりさしてやれ！」と、みんなを励ましていいました。

やがて、ときならぬいい音色が、山奥のしかもさびしい野原の上で起こりました。笛の音、胡弓の音、それに混じって悲しい歌の節は、ひっそりとした天地を驚かせました。おじいさんは雪の上にすわって音頭をとりました。若い女と、若い一人の男は立って踊りました。一人の男は、やはり、雪の上にすわって胡弓を弾いていました。女はいい声で歌い、立って踊ってい

る男は、片脚を上げて、唇に笛を当てて吹いていました。

雪は、いつしかやんで、月の光が、この下のときならぬ舞踏会をたまげた顔をしてながめていますと、いままで隠れていた星までが、三つ、四つ、しだいにたくさん顔を出して、空の遠方からこの有り様をのぞいていたのです。

木の枝に止まって、すべてのことを知りつくしていたすずめは、悲しくて悲しくて、たまらなくなって、熱い涙が目からあふれて出ました。しかし、そのときの寒さというものは一通りでなくて、目から出た涙は、すぐに凍って両方の目はふさがってしまいました。すずめは足をあげて目をぬぐおうとしましたが、このときは、はや両方の足が枝の上に縛りつけられたように、凍りついて離れませんでした。

すずめは、つくづく寒気というものを情けなしな、冷酷なものだと思いました。月も、星も、また雪までも、ああして感心して哀れな歌をきき、音楽に耳を澄ましているのに、寒気だけが用捨なく募ることを、すずめは腹だたしくも、またかぎりないうらめしいことにも思ったのです。

そのうちに、どうしたことか、歌の声も、音楽のしらべも、だんだん小さく、低く、遠のいてゆくのを感じました。けれど、すずめは、ついに明くる日の朝まで身動きもできず、目を開けることもかなわず、鋳物のように木の枝に止まっていました。

太陽が照らしたときに、すずめは、はじめてあたりのようすを知ることができたのです。

「昨夜のことは、みんな夢ではなかったか、あの人たちは、どうなったのだろう?」と、すずめは、小さな頭を傾けて思いました。なぜなら、あたりは、雪が二尺も、三尺も積もっていて、そのほかには、なにも目の中に入らなかったからです。

それからは、長い間、すずめは、このことが不思議でならなかったのです。すずめは毎日、雪の中を山のあちらへ、また、林のこちらへと飛びまわって、だれも通らない、さびしい雪の広野を見渡して鳴いていました。

そのうちに冬も老けて、だんだん春に近づいてまいりました。ある日のこと、西南の空のすそが、雲切れがして、そこから、なつかしいだいだい色の空が、顔を出していました。すずめは、木の枝に止まって、じっとその方を見てぼんやりとしていました。

暖かな南の風が吹いてきました。それからというもの、毎日のように、南の風が吹き募って、雪はぐんぐんと消えていきました。すずめは、もう冬も逝ってしまうのだと、体を円くして、心地いい、暖かな風に羽を吹かれながら、いままで埋もれていた山の林や、また野原の木立が、だんだんと雪のなかに姿を現してくるのを楽しみにしていたのです。

「ああ、じきに花が咲くころともなるだろう。そうすると、他国の方から、名の知らないような美しい鳥が飛んできて、林や森の中で唄をうたうであろう。それを聞くのがたのしいことだ。」と、この山のふもとに生まれて、この野原と、林としかほかのところは知らないすずめは、せめて他国の鳥の唄を聞くことを幸福に思っていたのです。

すると、ある暖かな晩に、すずめは野原の中から、笛の音と、胡弓の音と、悲しい唄の声を聞きました。すずめは、それを聞くとびっくりしました。いつかの哀れな旅楽師を思い出したからです。

いままで、その野原の中に凍っていた、それらの音色が、南の風に解けて、流れ出したものと思われます。しかし、その人たちの死骸は、飢えたおおかみやくまに食べられたか、見つかりませんでした。ただ、この物悲しい音色は、風に送られて、その後、幾夜も、この広野の空を漂っていたのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　3」講談社
　1977（昭和52）年1月10日第1刷
　1977（昭和52）年C第2刷
初出：「東京日日新聞」
　1922（大正11）年1月7日～10日
※表題は底本では、「春《はる》になる前夜《ぜんや》」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：江村秀之
2013年12月5日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春になる前夜

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/